
白い翼をはためかせ

ふる一つ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い翼をはためかせ

【ZPDF】

Z0898D

【作者名】

ふるーつ

【あらすじ】

とある少女が所有するルビーに狙いを定めたキッド。しかし、キッドを前にした少女の反応は意外なものだった。オリキャラがメインゲストです。

「おし、完了!」「

小さく、しかし元気に咳いたのは、今しがたまで自分の顔をいじつていた『警官』。

彼は、そばに横たわる男を見てニヤッと笑つた。彼とまったく同じ顔。ただ違うのは、熟睡している事と、下着しか着ていない事。

「お顔とお名前、拝借しますよ、柘植さん」^{つけ}

もう慣れてしまつた言い回しを眠る男に使うと、彼　怪盗キッドは颯爽と去つていった。

今回の獲物は、日本列島からそつ遠くない離島にある別荘に買いつけられた、ルビー。

とある機械メーカーの会長が、孫娘に贈つた物らしい。なんでもその孫娘は生まれつき体が弱く、数年前に自宅からそこに移つてから、ほとんど島を出たことがないんだとか。

「警部!全員そろいました」

「よし!これから島へ向かう。キッドはどんな細工をしてくるかわからん。気を抜くなよ!」

今日は予告の日。時間はおそらく夜だが、会長の要望で、昼には島に入ることになっている。

報道陣は一切なし。といつのも、船で簡単に行ける距離ながら、島全体が会長の私有地であるため、許可がないと上陸できないのだ。

「ああ、よつこじや中森警部！お待ちしておりました」

「どうも会長。早速ですが、ルビーは今どこに？」

「ああ、多分孫が、自分の部屋にしまっているでしょう。礼依さん、

ちょっと持つてきてくれ

「かしこまりました」

そう言つて会長の側を離れたその女性は、とんでもない美人だった。

「そうやう。お孫さんにも、一度お会いしたいんですけど、よろしいですか？」

中森警部の提案に、会長は頷いた。去りうとしていた彼女に声をかける。

「そうですな。おい礼依さん、夏貴も呼んできてくれ。やうやう、この方たちの顔を覚えるのを忘れずにな

「はい。只今」

彼女が去ると、中森警部は尋ねた。

「あのー、どうして彼女が我々の顔を覚える必要が？」

会長は手をポンとたたいた。

「ああ、忘れておりました。彼女は駒沢礼依さんといつて、孫の世話係なんですが、こここの警備の責任者でもあるんですよ」

「え！？か、彼女が！？」

素直に驚く警部に、会長はからから笑つた。

「まあ、驚かれるのも無理ありません。彼女は、ああ見えて東大工学部を出ておりまして、記憶力も抜群なんですよ。私自身、彼女には全幅の信頼をおいております」

驚く面々。才色兼備とはまさにこのことだ。

礼依に連れてこられた少女は、無表情に捜査員たちを見回すと、

一言。

「もういい。戻る」

予想通りだつたのだろう、苦笑する礼依をよそに、会長が呼び止

めた。

「こちら夏貴！今夜、あの泥棒からルビーを守ってくれる人たちだぞ！きちんと挨拶せんか！」

祖父の苦言に、夏貴はやれやれといった様子で振り向くと、警視庁の面々を睨みつけた。

「あれ、あげないから

「え？」

声を出した警部に田標を定め、続ける。

「あれ、あたしのだから。おじさんたちにはあげない

それだけ言って、今度は本当に去った少女を見ながら、警部は恐る恐る訊いた。

「もしや、例のルビーはあの子が？」

「ええ、買ってやった時はそうでもなかつたんですが、キッズから予告状が来てからは、随分と執着するようになります。今では部屋から出さない有様です。礼依さんの頼みでも出さないとは、相当気に入つたんですね」

ボヤく会長。しかし、警部は逆に笑顔になつた。

「そうか、それならさすがのキッズでも、そうやすやすとは手に入られられまい。よーしー！各員は予告20分前になつたら、あの子の部屋のまわりを固めろ！」

その後、次々と出される指示に従つたふりで動きながら、快斗はあの少女の顔を思い出していった。

警察も会長の警備も、出し抜く自信はある。用意もしてきた。けれども。

今回は、正面からいってみようか。

細工を弄するより、正面からいつた方がうまくいく……そんな、予感のよつなものがあつた。もちろん、サポートも仕掛けておくが。

あの子、言葉で通じそうな気がする。なぜかわからないが、そう

思つ
た。

前編・紹介（後書き）

これも、短編にするつもりだったんですが・・・。書いてる途中で、「うわ長っ！！」と気付き、前後編に。後編はいよいよ本番です。

あたりが暗くなり、別荘全体がライトアップされた頃。警官の変装をといた快斗はキッドの衣装をまとい、建物の外から夏貴の部屋へと回りこむ事にした。

もちろん、警官がひしめいている。が、そんなもの問題ではない。難なく部屋の窓にたどり着くと、ガラスを軽くコンコンたたいた。

部屋の中で、ルビーを手にしづくまつている少女が、振り向く。

「こんばんは、お嬢さん」

一応、キッズらしい言い回しで挨拶するが、警戒は怠らなかつた。なにせ、したことのない賭。途端に警官を呼ぶ可能性もある。

そして、彼は賭に勝つた。夏貴は一瞬で笑顔になり、窓枠に乗る怪盗に抱きついたのだ。

「泥棒さんだー！ホントに来た！」

ついで、背後を振り返つて指を口に一本立てた。

「おじいさまも、おじさんたちも呼んじやだめだよー。」

その視線をたどり、キッドの目は全開になつた。

窓から見たら陰になる所に、駒沢礼依が立つて、しかも通報もせずに微笑んでいるのだ。

（おーおー……何だよこの女）

困惑するキッドをよそに、夏貴はルビーを取り出す。手元の時計を見て、なんと差し出してきた。

「これあげるーあげるから、お話を聞かせて」

「……話とは？」

「泥棒さん、色んな所に行つてるんでしょ？そのお話を聞かせて！じゃないと、おじさん呼んじやうよ？」

……別に呼ばれたところで大した事じゃないが、予告まで時間も

あるし、楽にルビーを手に入れる対価だと思えば、安いものか。

キッドは、かみくだいて今までの仕事を語った。ほんの10分の話だったが、夏貴は目を輝かせて聞き入った。

「お嬢様、そろそろ時間です」

腕時計を見ながら、礼依が話に割り込んだ。夏貴は「えー？」と口を尖らせながらも、約束通りルビーを差し出した。

「ありがとう、泥棒さん！　はい、これ」

「…嬉しいのですが、これはお気に入りではなかつたのですか？なぜ私に？」

夏貴は田を点にした後、くすくす笑つた。

「別にこんなの、どうでもいいよ。でも、これ持つてたら、泥棒さんとお話できると思つて。あたし、泥棒さんの大ファンだもん」なるほど。警察に渡してしまつと、厳重な警備下に置かれ、取引の材料にできなくなる。だから、部屋から出さなかつたわけか。

「お嬢様、警察の方を呼びますよ
「はーい」

ビ
！

けたたましい音が鳴り響き、警官が部屋になだれ込んできた。すかさず窓枠に乗り、ハンググライダーを広げたキッドは、田の前の光景に驚いた。

「こちら側だけ、捜査員が一人もいない。

「大丈夫ですよ、情報を操作しておきましたから」

いつの間に來ていたのか、背後に礼依がいた。キッドは不審さを否めない。

「…なぜ、私を助けるのですか？…あの子が、私のファンだから

ですか？」

だとしたら、随分身勝手な人間だ。仮にも、自分は犯罪者。

礼依は部屋をチラッと見て、夏貴が捜査員に保護され、聞いていないことを確認した。

「ただのファンじゃありません。あなたは、お嬢様の希望なんです」

「……？」

礼依は心なしかうつむいた。

「お嬢様が病弱で、ほとんど出歩いたことがない」という事は、ご存知ですね？」

「ええ」

「ですから、白い翼を羽ばたかせ、世界中を自由に駆け回るあなたに、お嬢様はずつと憧れていきました。今回、ルビーを会長にせがまれたのも、あなたが狙うかもと思つたからです」

「……そうですか」

「なるほど。だから、自分が知らない……いや、知ることができない、世界の話を聞いたがつたのか。ほんの10分のことでも。

「ですから、万が一にでも、ここで捕まつて頂くわけにはいきません」

「……しかし、会長には叱責されるでしょう。あなたは、警備の責任者でしょ？」

礼依は自信ありげに笑つた。

「私は、お嬢様の1番のお気に入りです。他の誰もお嬢様を言い含めることは出来ませんが、私ならできます。『心配には及びません。後でルビーを返して頂ければ、問題ありません』

彼女は、あたりの様子をうかがつた。さつきより、明らかに騒がしくなつていて。

「そろそろ、ここにも捜査の方たちが来られます。……『無事で』

最後には、客人でも送るよう、一礼した。

夜空を飛びながら、キッドの脳裏に、あの少女の笑顔が浮かんだ。自分は、世間的に見ればただの犯罪者。近づくのは、報道関係と野次馬、そして警察関係者のみ。やつ想つていたが。……そんな風に思われる存在もあるのか。

翌日、新聞に、『盗賊キッド、またお宝をゲット…』といふ文字が躍った。

思えば、キッドを小説で出すの初めてです。

なぜこんなに礼依さんの扱いが多いかといえば、元々彼女を主人公にした話を考えていたからです。

それが、彼女は本当は、会長が孫のために作ったロボットで・・・

という話。「機械メーカー」と「東大工学部卒」はその名残です。

少しでも心に残ったという方、評価や感想など下さると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0898d/>

白い翼をはためかせ

2010年10月8日15時36分発行